

ます。しかし、甲賀大教会の初代様は、この元の理のお話を夜が更けるまで何度も何度も聞かされたそうであり、多分聞いていた方は「またか」ともう同じ話ばかりでうんざりしていた事でしょう。しかし、翌朝その方はびっくりしたのであります。長年患っていた痔の病が一夜にして御守護頂いたのです。そしてその方は即入信したのであります。

元の理のお話は、初めての方には大変難しく、面白味の無い話に思えるかも知れませんが、他宗教には無いとてつもなく大きな御守護を頂ける話なのであります。それは何故かと言うと、人間はどういうふうな造られたかというお話だからであります。

おふでさきの八号の21番では『このよふのはじまりだしのしんぢつを しらしてをかんに事をいてわ』九号の29番には『いまゝでにいたすけをばするからハ もとをしらさん事にいてわ』とありま

ものであります。元の理の内容とはどういったものか、それは皆さんもよくよく聞いてみるとは思いますが、この世の元初まりは泥の海でした。

泥の海といいますが、海も山も天地の区別も何も無い状態、まして人間は全く存在していない世界であります。この様子に親神様は、月日親神だけがいる世界は全く味気ないと思われ「そうだ、人間を造ろう。人間を造り、陽気ぐらしをするのを見て共に楽しむ」と思い付かれたわけであり、人間を造り、陽気ぐらしをするのを見て、共に楽しむという「共に楽しむ」という所が非常に大事になるわけであり、陽気ぐらしをする為、人間が造られたのですから、我々人間は元々何も考えずに生きていけば陽気ぐらしが出来る様に親神様が造って下さっております。人間は元々助け合うために造られ、陽気ぐらしをする元のいんねんを持つてい

こういった心遣いが病気や悩み、この種になり、その事で苦しまなければならなくなるのであります。

元の理のお話では「どぢよ」「うを」「み」「しゃち」「かめ」「ふぐ」など、他にもさまざまの動物の名前が出てきますが、これは実際にその動物がいたのではなく、親神様がどの様なはたらきをもって人間をお造り下されたのかを、当時の人達に分かりやすく説明する為、動物の姿や特徴を出してお話下されていると悟れるのであります。

それでは少し省略しますが、人間をお造り下された元の理のお話をこれよりお話させていただきます。まず、親神様は泥海の中をずっと御覧になっておりました。その中に沢山の「どぢよ」がおりました。その中に「うを」と「み」、「うを」と言いますのは魚であり、この「うを」と「み」を発見したわけであり、このものが夫婦になるのが良いだろうと思ひ呼んでみますと、真つ直ぐに親神様の方へ泳いできました。ちなみに、この真つ直ぐに泳いできたというのは、皆様よく耳にする「一すじ心」という心であります。とにかく素直にまずは話を聞かせてもらおうという事が、「一すじ心」になるわけであり、

しみをお説きになり、元の屋敷、この元の屋敷と言いますのは、現在のかんろだいななるわけであり、すけれども、この元の屋敷に連れ帰って神として拜をさせようと約束されてから、承知をさせて貰い受けられたのであります。

この「うを」と「み」は月日親神様が食べてしまわれるのではなく、人間を宿し込む、人間を造る際には「うを」には月様、「み」には日様が入り込みになるのであります。道具衆の中でこの二柱だけは入り込んでもらっている。後の六つは食べて心根を味わい、親神様の身体の中へ溶け込んでしまうのであります。

おふでさき十六号の12番には『しかときけこのもとなるとゆうのハな くにとこたちにもたりさまや』とありますように、「くにとこたち」に「をもたり」さまやと「さま」がついているのはこの二つの神様だけで、他の神名とは一段別格なのであります。この世の真実の神は月日親神様であり、月様を「くにとこたちのみこと」、日様を「をもたりのみこと」と教えて頂